

6月1日

メシヤ王国の預言
(ゼカリヤ書9-11)

シオン^九の乙女よ大いに喜び、エルサレムの娘よ呼ばはれ。見よ汝^なが王^い汝^いに來たる。彼は義にして救、柔和にして驢馬に騎る者。牝驢馬の仔なる駒に騎るなり。

「我れエフライムより戦車を絶ち、エルサレムより軍馬を絶たん。戦争^{たたかひ}の弓も絶たるべし」

かくて彼は平和を国々の民に諭^{さと}さん。その統治は海より海に及び、河より地の極^{はて}にまで亘^{わた}らん。(九・九、一〇)

ゼカリヤ書九—十四章の無名の預言者は第二イザヤのように第二ゼカリヤとも呼ばれる。極めて黙示文学的なものでメシヤ預言が光を放っている。「シオンの乙女」も「エルサレムの娘」もシオンの城下町住民のこと。ダビデの市^{まち}とも謂はれる。ダビデ王の存在自身が全地に君臨して神の意志を体现するメシヤ(救主^{すくいぬき})の預言であるので、そのようなメシヤ的な王を待望する預言の文字である。義にして救という觀念は第二イザヤ(イザヤ五一・五六、八)にはっきり出てくるが、サウルの父キシが捜し求めさせたのが驢馬で、驢は謂はばダビデの徴の如くで、メシヤ、キリストが驢馬に乗ってエルサレムに入城したのが冥合のようだ。柔和な心の人キリストの預言としてまことにふさはしい。エフライムは北王国イスラエルの中心部でイスラエルを意味する。人類の歴史上に戦争が絶たれる預言だから全く終末的預言である。キリストの來臨と世の終末に関はる驚くべき預言である。

6月2日

メシヤとエホバ
(ゼカリヤ書12-14)

○我れダビデの(王)家及びエルサレムの住民の上に恩恵と感恩の
霊を^み瀦^みがん。彼らはその刺したりし我を仰ぎ瞻、独子のために嗟歎
し、長子のために悲歎する如く彼のために哀歎せん。その日にはエ
ルサレムに大いなる悲歎あらん。(二・一〇、一一上)

○その日罪過と汚穢を潔むる泉ダビデの家とエルサレムの住民の為
に開かれん(二・一二)

(二四・四上)

○その日にはエルサレムの前方東なる橄欖山の上に彼の脚立たん。

○一つの日あらんエホバ之を知る。夕暮時に光あらん。(二四・七)

○斯くて実存主全地の王。その日には独り実存主の名のみ。(二四・九)

ゼカリヤ書一二・一〇の「その刺したりし我」なる驚くべき啓示の預言。正に十字架上のキリストの言かとあやしむばかりの言。「恩恵と感恩」と訳した原語は同語異形で、神の本願のめぐみに対する悲願的切願で、霊恵と霊賜の霊と新約的に申して可い。この一節は十字架と聖霊の消息の驚くべき預言。第一三節の贖罪の泉は十字架の血である。キリストが橄欖山のゲッセマネを思はしめる第一四節。「一つの日」も「その日」と同じこと、「夕暮時に光あらん」とは昼夜の時の流れの中で、憧憬の念をそそる夕暮に永遠的な光がさしてくるとは希望の何たる美しき実現かな。実存者が全天地の王となるの預言は天地に自在に遍在し給う実存主なるキリスト。(二二—二四章は第三ゼカリヤとも称う。)

6月3日

義の陽
(マラキ書)

○万軍のエホバ言ひ給ふ、視よ！ 炉の如く焼くる日来らん。すべて驕^{たか}ぶる者と悪を行ふ者は藁の如くにならん。その日来らば彼らを焼き尽して根も枝も残らざらしめん。されどわが名を畏るる汝には義の陽出でて昇らん、その翼には医^ちす能力あり。(四・一、二)

○見よ、実存主の大いなる畏るべき日の来る前に、われ預言者エリヤを汝らに遣はさん。彼れ父の心をその子らに、子らの心をその父に立ち帰らしめん。(四・五原典三・二四)

日本の旧約聖書の最終巻はマラキ書。マラキとは「わが使者」の意で普通名詞だが、それがこの場合固有名詞化されて一預言者の名の如く扱はれている。内容を見ると祭司的性格の預言者である。第二神殿(五一五年)のことが書かれてあるから、それ以後のものである。驕慢な権勢者は東西の政治史に於ける歴然たる現象であるが、神の審判の「その日」にはそのような存在は根こそぎにされ、地獄の劫火に焼かれる。神の名を畏れる者たちには、「義の陽」たるキリストが出現して、その「翼」即ち太陽光線の如き愛の靈光が身心の病を癒す力をもっている。

父と子らの相互帰入！ そういう親子の信愛関係の回復こそ二十世紀末の火急の課題である。民主主義の偏破な理解のために親子、神人の相互帰入の信愛関係が崩れたら神の撃破が来るという最終預言、畏るべし、立ち帰るべしである。

6月4日

心を裂いて立ち帰らん

(ヨエル書)

二三
○エホバ宣ふ「今にてもなほ汝ら断食と悲涙と悲歎とをなし、心を

尽して我に帰れ！」汝ら衣を裂くに非ず、心を裂きて汝らの神エホ

バに帰れ。彼は恩恵あり、愛憐あり、怒ることゆるやかにして愛ゆ

たかなれば災害をなすことを悔い給ふなり。(ヨエル二・一二、一三)

◎その後、我れわが霊をすべての現身に灑がん。汝らの青年、乙女

は預言せん、汝らの老人は夢を夢み、汝らの壮年は異象を見ん。そ

の日我れまたわが霊を僕婢に灑がん。(ヨエル二・二八、二九。原典三・一、二)

ヨエルとは「ヤハウェ(エホバ)は神なり」の意。イスラエル民族に自現した神ヤハウ

エ、実存主は全世界の神である。イタリアの大詩人ダンテの『神曲』はイタリアの文学で

あると同時に世界文学である。そのように真乎の個、特殊は普遍性、永遠性をもつ。ヨエ

ル書一・一五に「噫その日は禍なる哉、エホバの日迫れり、あらしの如く全能者より来ら

ん」とある。ヨエル書の書かれた背景は、旱魃に連関して蝗虫の四回に亘る大来襲のため、

大荒廃を喫した時で、ヨエルは右掲の如く、「断食、悲涙、悲歎を以て全心中に我に帰れ」

との聖言を聴いたので、「心を裂いて」神に立ち帰らんと血の叫びを以て勧告している。

正直に立ち帰る者を神は無条件にゆるし迎へ愛して下さる。この人災(罪から来る現象)

や天災の終末的現実でヨエルに啓示されたのは神の御霊の万人への灑ぎかかりであった。このヨエルの預言はキリストの復活後の五旬節の日に俄然聖霊の降臨となって実現した(使徒行伝第二章参照)。

6月5日

ひさご しるし
瓢の徴
(ヨナ書1:3)

○ヨナは彼らに言った「私を担ぎあげて海の中に投げ込んで下さい。海はあなた達のために凧なぎとなりますよ。私は知っているんです、この大時化しけが貴方達あなたにやって来たのは私の因ためなんです」。

○さてエホバはすでに大きな魚を備えておいてヨナを吞のましめ給うた。ヨナは三日三夜魚の腹の中に居ました。(二・一七)

○エホバの言再びヨナに臨んだ、「起つて大なる府まちニネベに往き、

私がお前に命いのちずることを宣べよ！」(三・一、二)

○エホバ神瓢ひさごを備へ、これを発生させ、「ヨナの」頭上を覆おほはしめた。これはヨナの頭のために日蔭をつくって、その憂いを慰めるためであった。ヨナはこの瓢の木で非常に喜んだ。けれども神はその翌日の夜明に虫を備えてその瓢を嚙かませたので瓢は枯れた。(四・六、七)

今日で十二小預言書が終る。ヨナ(原語の意味は「鳩」)は列王紀下一四・二五に記されてある預言者で、北王国イスラエルの爛熟期ヤラバム二世(紀前八世紀末)治下の人で、預言者アモスが南王国ユダに現はれた頃である。当時の大国アッシリヤの首都ニネベに対する神の審判の警告、ニネベの悔改め、神の憐憫の消息を語った宗教物語で、こういう事実はないのだが、筆者はずっと後代の無名の預言者である。(解説的告白は六月六日に。)

6月6日

神の本願

(ヨナ書4:10, 11)

エホバは宣うた「お前は勞せず育てもしないこの一夜で生えて一夜で枯れた瓢をさえ惜んだ。まして十二万余の右も左もわからない「幼い」者とたくさんの家畜のいるこの大都会ニネベを私が惜しまないことがあるうか。」(ヨナ四・一〇、一一)

ヨナ書の物語を辿りつつ、所感を告白しよう。アッシリヤの大都市ニネベは、古今東西の大都市によくあるように、罪惡が甚だしくなつて来た。それでエホバがヨナに神の審判の言を告げるように命ぜられたが彼はこれを拒んで當時の西の極なるタルシシへ向う船に乗って逃げた。暴風となった。乗船者たちが、この難航は誰かの因だといつて籤引きをした。ヨナに當った。ヨナは自分がヘブル人たることの信仰告白をした。そして船が難航しないためには自分を海に投げ込めと犠牲の申し出をした。連想するのは弟橋姫が相模灘で投身して海を鎮めた故事である。ヨナはエホバが彼の知らぬ間に備え給うた大魚の腹の中に三日三夜を宿った。キリストはこの故事を御自身の復活前の死に譬え給うた(マタイ二・四〇)。ヨナは陸に吐き出されてからはエホバの命に従つてニネベで神の審判の予告をした。ニネベの王を始め都民が悔改めた。これはこの無名の預言者の終末的悲願で、二十世紀の今日、ニューヨーク、モスクワ、そして東京がこの物語のニネベの如くあらんことを！ヨナは之に対してパリサイ根性で怒った。それでエホバは瓢の徴を以てヨナを諭した。神は全人類の各個人が神に立ち帰らんことをのみ本願としておられる、合掌。

6月7日

幕屋より幕屋に
(歴代志略上)

「我はイスラエルを導き上りし日より今日にいたるまで、家に住みしこと無くして、ただ幕屋より幕屋に、天幕より天幕に移り住まへり。」(歴代志略上一七・五)

ダビデが千軍万馬の戦を終えて、エルサレムを都として、王者らしく名木レバノンの香柏を以て宮殿を建てそこに腰を据え、多くの妻妾をかかえる栄華な生活に入る。しかし彼はエホバ神の契約の匱がなほ幕屋の中にあるのを気にして、預言者ナタンに神殿の件を問うた。ナタンは、一応ダビデに心のままにしたら宜しいと応へはしたが、その夜、ナタンはエホバの聖言を聞いたので、ダビデに伝えた。それが右掲の聖言であった。

「それ天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり、而して浮世は夢の如し」とは李白の名句であるが、天地自然を旅人の宿屋となし、時間を百千代の旅人に譬えているように、我々は歴史の中を歩いている旅人であり、天地到るところが宿屋である。永遠界から時空界に降臨したのがエホバの神である。この神は見えざる旅人としてアブラハム以来イスラエル民族と共に旅をなさった。今日の幕屋から明日の幕屋へと臨在し、民に語りかけて旅路を導き、天幕から天幕へと宿って親しく旅を共にした。これが神の在り方であるから、神殿は要らない。

6月8日

ソロモンの神殿

(歴代志略下1-9)

五 わが建つる家は大なり、我らの神は諸々の神よりも大なれば也。然れど天も諸天の天も彼を容るる能はざれば誰か彼の為に家を建つるを得ん。我何人なれば、彼の為に家を建てんとするや。唯彼の前に香を焚かんのみ。(三・五、六。原文は一、四、五)

ダビデは王宮を建てたが神殿は幕屋の神のゆえに建てなかった。ダビデがパテシバなる特愛の王妃によって得たるソロモンは魂も智慧も秀れた王であつただけに、ダビデの心はよくわかつていたが、驚くべき人員を動員し、驚くべき工費と資材を用いて二十年の歳月を以て大神殿を建てた。その内容は歴代志略下の――九章に互つて詳かに記してある。その大神殿建設の精神は正に右掲の一言にあふれているのではないか。エホバ(ヤハウェ)なる神は絶大なる神、全世界はおろか諸天の天も彼を容れることのできない霊神である。その神の為に神殿を造る自分は何たる愚者ぞと平伏している。大神殿も香を焚き祈らなためのみという心である。そして幕屋を神殿の中央に置いて、その至聖所に契約の匣が安置されたわけである。彼ソロモンの祈りが第六章に記されてあるがまことに碎けたる平伏しの魂の祈りである。祈り終ると、天から火が降つて燔祭と犠牲とを焚き、エホバの栄光が神殿に充ち祭司も入れなかつた。霊火の降臨をイスラエルの子らは見て敷石の上で俯伏して、神を讃美し「善恵なる哉エホバ、その恩恵は永遠なり」と叫んだ(七・一二)。形ありて形なきソロモンの神殿！ その後の第二神殿も遂に活ける第三神殿キリストに帰する。

6月9日

ペルシヤ王クロスの詔勅
(エズラ書1)

ペルシヤ王クロスの元年に当り、エホバ嘗てエレミヤの口によりて伝へ給ひしその聖言を果さんとて、ペルシヤ王クロスの心を感動し給ひければ、王即ち勅命を伝へ、詔書を出して遍く國中に告示して曰く、『ペルシヤ王クロスかく言ふ、天の神エホバ、地上の諸国を我に賜へり。その家(神殿)をユダのエルサレムに建つることを我に命ず。……(エズラ一・一、二)

エズラは大祭司アロンを祖先に有つ祭司系の出身で、バビロン捕囚からペルシヤ王クロスの捕囚解放により、捕囚の民を千余名も導いて帰還した一方の指導者である。

さてクロス王の元年は、バビロンが攻略された年、即ち紀前五三八年である。エルサレムのために熱涙を流して祈ったエレミヤが賜った預言は、エレミヤ二九・一〇に「バビロンに於て七十年満ちなばわれ汝らを顧み、わが嘉言を汝らに与えて汝らをこの処に帰らしめん」というのであった。ペルシヤ王クロスの心はエホバに捕えられて、エレミヤの預言成就のことが起きた。クロスがエホバを神として拝するに到ったとは。

この度第一神殿たるソロモンの神殿が破壊消滅したので、第二神殿はユダヤ民族の魂の拠り所として建てることを神の命令として受けとっている。エズラとネヘミヤがこの神殿再建の大任を承ったわけである。当時の外国の世界的君主が捕囚民を解放しその民のために神殿を建てるとは、歴史上稀有なことである。イスラエル民族は諸々の苦難を通して全世界に歴史と全世界を導く神を伝える超民族的使命を負はされている。

6月10日

ネヘミヤの祈り

(ネヘミヤ記1)

「願はくはエホバ、天の神、偉大にして畏るべき神よ、我らは汝に
 対して大いに悪行をなしたり。汝の僕モーセに汝の命ぜし誠命をも
 法度をも規定をも守らざりき。汝の僕モーセに命じ給ひし言を憶ひ
 給へ。其の言に曰く、『汝ら若し罪を犯さば、我汝らを国々に散ら
 さん。然れども汝ら若し我に立ち帰り、わが誠命を守りてこれを行
 はば、假令逐はれゆきて天の涯に居るとも、我そこより汝らを集め、
 我が名を住まはせんとて選びし処に來たらしめん』と。げにや是ら
 の者は汝が大なる力と強き手をもて贖ひ給ひし汝の僕ら、汝の民な
 り。」(一・五…一〇)

ネヘミヤ(語意「神は慰め」)はベルシャ王アルタクセルクセス(在位紀前四六五―四
 二四)の配膳頭であつたが、エルサレム城壁改築に力を尽した当時は総督の地位にあつた。
 その先任者はゼルバベルであつた。エズラは主として内面的な信仰復興に貢献したが、ネ
 ヘミヤは内政面で活躍したわけである。しかし、右掲の祈りの如く、彼も五一五年に落成
 した第二神殿の神殿宗教を外形的なものたらしめない預言者の精神を継いだ魂であること
 を知る。彼らの城は神殿である。しかし神殿より不滅の城は彼らに啓示された聖言の城即
 ち聖典である。しかもその聖典の骨格は律法、生命の血は預言者(書)である。

6月11日

権力者の傍若無神の相
(イザヤ書1)

二 天よ聴け、地よ耳を傾けよ。エホバ語り給ふ『我れ子らを養ひ育てしに彼ら我に反けり。牛はその飼主を知り、驢馬はその主の厩を知る。然るにイスラエルは識らず。わが民は悟らざるなり』。

三 忠信なりしこの都いかにして遊女とはなれる。昔は公平にて満ち、正義そのなかに宿りしに、今は殺人の巷と化しぬ。汝の長者たちは叛きて盗人の徒輩となり、各々賄賂を悦び、贈物を追求し、孤児のため正しき審判を行はず、寡婦の訟訴は彼らにまで到らざるなり。

(以上、イザヤ一・二、三、二一、二三)

イザヤ書全六十六章は、旧新約聖書全六十六巻(旧約三九巻、新約二七巻)の縮図の如き大預言書で、第一イザヤ(一―三九章)、第二イザヤ(四〇―五五章)、第三イザヤ(五六―六六章)の三部作から成っている。第一イザヤ書は大預言者イザヤのもの。第二、第三イザヤ書はいづれも無名の預言者のもの、時代的に捕囚期前、捕囚期直後、及第二神殿初期と見なされる。イザヤはユダ国王ウジヤの歿年紀前七四六年からヨタム、アハズ、ヒゼキヤの三代に亘ってイスラエル・ユダに対して預言活動をした。ミカやエレミヤとある時期を同じうしている。右掲のエホバの嘆きと預言者の社会批判的預言の内容は、人類の歴史に於て、傍若無神の権力者たちが繰返し犯して来た罪業である。

6月12日

軍備全廃の預言
(イザヤ書 2)

◎神は^(エホバ)諸々の国の間を審き^{さば}多くの民を譴め^せ給はん。斯^かくて彼らはその劔をうち替へて鋤となし、その槍をうち替へて鎌となし、国民は国民に向ひて劔を挙げず、戦のことを最早学ばざるべし。(二・四)

○その日には目をあげて高ぶる者は卑^{ひく}くせられ、驕^かる人屈められ、唯神^(エホバ)のみ高く揚げられ給はん。(三・一二、一七)

右掲二・四の聖句の内容は現実には考えられない終末的な世界平和の実現を祈り心で預言しているわけである。軍備全廃である。劔が鋤にうち替えられ、槍が鎌にうち替えられる、とはまことに美しい言である。全世界の権力者、軍部が、神の前に平伏して大量殺人たる戦争全廃となることは考えられないが、それには、実は万人の一人一人が本当に「汝殺すなかれ」否、「汝は殺人はしない」との神からの信頼の聖言を体受することが現実とならねばならない。それは「敵を愛する」愛、キリストの愛、釈迦の慈悲が身についてこそ可能である。預言者イザヤやミカ(四・三)がこのような預言をするとともに、実は神の本願がかかっている。そしてそういう歴史的終末に神の国を望むところに預言者の祈りがある。そのような時期を預言者たちは「その日」とか「末の日」とかいう言葉で指さしている。二十世紀末の今日、世界の政治家たちは旧約の預言者たちの終末的希望の烈々たる火の言、深刻な涙の言に新たに耳を傾けるべきである。

チャップリンが「独裁者」の最後の台詞でこう叫んだ「思いやがないと暴力だけが残る。神の国は人間の中にある。貪欲と憎悪を追放しよう。」

6月13日

葡萄園の歌
(イザヤ書 5: 1-7)

五・一

われわれが愛する者のために愛する者の歌、即ち彼の葡萄園のこ
とを謳はん。わが愛する者は肥沃の山地に葡萄園を有てり。彼その
園を鋤き返し、石を採り除き、好き葡萄を植え、その中に望楼を建
て、酒榨を掘りて好き葡萄の結ぶを望み待てり。然るに結びたるも
のは野葡萄なりき。それ万軍のエホバの葡萄園はイスラエルの家な
り。その喜び給ふ植物はユダの人なり。これに公平を望み給ひしに
反りて血を流し、これに正義を望み給ひしに反りて泣き号びあり。

預言者イザヤは、ユダの首都エルサレム出身の都会人、しかも宮廷に出入する高貴な家
柄の人、所謂智識階級の人、而も政治に関与することの出来る知名人であったと思われる。
しかしそれらの資格と彼が預言者であるということとは次元がちがう。彼は正に信仰の人
であった。信仰の人の中で特に祈深い人が神から直接授けられて預言者にされる。預言者は
単独者である。神の啓示の言は波状的に臨む。預言者はおのづから詩人である。

この「葡萄園の歌」は原文では勿論詩である。(僅か七節の詩是非お読み下さい)。「愛
する者」とはエホバのこと。「イスラエルの家」も「ユダの人」も要するにエルサレムを
中心としたイスラエル民族のこと。心を尽して愛し導いたこの民が神意に叛いて謂はば野
葡萄になったから、外敵の荒らすにまかせると三十一節で神の怒が爆発している。葡萄は
血に譬えられ生命の象徴。神の生命を賜っているイスラエル民族への深い哀歌。

6月14日

イザヤの召命（其一）

（イザヤ書 6：1-5）

ウジャヤ王の歿年に我れ見たり、主の高御座に坐して高く揚げられ給ひ、その裳裾神殿に満ちたがれるを。

熾天使らその上に立つ、彼に六翼此に六翼、その二つもて面を掩ひその二つもて脚を掩ひその二つもて飛び翔り、彼此相呼ばはりて言ふ、『聖なる哉、聖なる哉、聖なる哉万軍のエホバ！ その栄光は全地に満つ』。闕の基揺り動きたり斯く呼ばはる者の声により。而も神殿煙に満ちぬ。この時我言へり、「禍ひなる哉我れ破滅せん、我は穢れたる唇の者、穢れたる唇の民の真中に我は住み、万軍のエホバなる王をわが眼見奉りたればなり」。（六・一五）

南王国ユダのウジャヤ王は紀前七四六年頃に歿したが、その年にイザヤはこのような召命に遭った。霊的高揚の境地に於ける靈幻である。神殿で祈っていたときである。二つの熾天使らがおそく向い合つて舞いながら、「聖なる哉」（カードーシュ）を三呼して天の万軍の神を讃美した。イザヤが神をしばしば「聖者」と呼んでいるのはこの讃美による。神殿が煙に満ち、震動したとは、モーセのシナイ山に於ける啓示の場合を連想させる靈煙靈震である。罪ある人間が聖なるものに面接するとそこに文字通り倒される。パウロの回心の場合がその著しい例であった。彼は自ら畏れ平伏した。モーセに対して「我れエホバ汝らの神は聖なり」（レビ九・二）と宣うた。我執なき無我者、無者が聖である。

6月15日

イザヤの召命（其2）

（イザヤ書6：6-10）

時しも我に飛び来れるはかの熾天使の一者、その手には焼石を携へて。そは祭壇より火箸にて挟み採りしものぞ。そをわが口に触れしめて言へり。「見よ、この焼石汝の唇に触れたれば、汝の不義は除かれ汝の罪は掩はれたり」。その時我は主のみ声を聞けり、曰く、「我れ誰を遣はさん、誰か我らの為に行く者ぞ」。その時我言へり「我此処に在り、我を遣はし給へ」。

彼言ひ給ふ「往きてこの民に語れ、『汝ら聴きて聴け、されど悟らざれ、見て見よ、されど知らざれ』」。

国民の罪をおのが罪とし、神のみに平伏したイザヤに「聖なる哉」を三唱した熾天使の一者が祭壇から火箸で挟んできた焼けた石をイザヤの唇に触れさせた。勿論霊的異象である。そして天使は言った。「お前の不義も罪も消えたぞ」と。絶対恩恵の贖罪の徴である。すると「誰を遣はそうか」とのみ声である。イザヤは別の次元に救いあげられていたので、憚ることなく、「ハイ、どうぞお遣はし下さい」と返答した。神は不思議な聖言をイザヤに託された。民がどんなに聴こうが、見ようが、心が頑なで預言者の言を受けず亡びる。だから逆語的な神の言である。唯だ少数の「聖き裔」が残って後の代の根幹的存在となろう（六・一三）との希望が与えられた。

6月16日

信仰不動
(イザヤ書7)

もし汝ら信ぜずば、断じて持ち堪えじ。(イザヤ七・九下)

預言者イザヤは、彼の召命の体験によって万軍のエホバの神を特にイスラエルの聖者(五・二三、一二・六)と称えている。この神への信仰は不動であった。だからイザヤはまた特に信仰の預言者といふことができる。それは新約のパウロに於て受け継がれている。右掲の七・九下のイザヤの言はその面目を端的に表はしている。この「信ずる」と「持ち堪える」の二語は実は同語「アーメン」を語根としている。神を信ずることは神に自分を全托して信入すること。信仰はもともと神の力に圧倒されて信ぜざるを得ないのが本当であるから、信は不動ならざるを得ない。ありがたき哉信仰は不動なりである。

イザヤは南王国ユダの王アハズとその民が、アラム(スリヤ)の王レヂンと北王国イスラエルの王ベカの反アッシリヤ同盟軍に攻められたとき(紀前七三五―四年)神の啓示を受け、スリヤ・イスラエルの力は「二つの焼え残りの煙った薪木(たきぎ)のようなものだから懼れる勿れ」(七・四)「若し信じないなら持ち堪えないぞ!」(七・九)と喝破したのである。果然、スリヤは七三二年に、イスラエルは七二一年にアッシリヤに亡ぼされた。

この聖句と相照応する聖句を記載しよう。「主エホバ、イスラエルの聖者かく曰う、「汝ら立ち帰りて静かにせば救を得、穩かにして信賴せば力を得ん」(イザヤ三〇・一五)。この聖句はルター特愛のものであった。



予言者イザヤ（ミケランジェロ）

6月17日

インマヌエル
(イザヤ書7)

この故に主自ら汝らに一つの徴^{しるし}を賜はん。視よ、若き女孕みて子を産まん。彼女はその名をインマヌエル（「神我らと偕に」）と称えん。
(イザヤ七・一四)

イザヤは北イスラエル国の亡びに繼いで南ユダ国もやがて同じ運命になることは予感していた。不信に対するエホバの審判である。しかし義の審判のあとに義を与える恩恵の義のおとづれも予感していたであろう。それ故に「遺れる者^{シュイム}」という言葉がしばしば出てくる。信仰を貫く選びの民である。聖なる神に信服、信従するこのような遺れる者はやはり「聖」と謂われる。聖徒という概念はイザヤに由来するというべきである（イザヤ四・三）。聖は冷たい潔さではなく、光と義と愛のあふれた内実である。イザヤは自分の子に「シェアル・ヤーシーブ」という名をつけた。「遺れる者^{シュイム}来らん」という意味である（七・三）。エホバのみ許に帰り来たる相^{すがた}が本当の前進である。

南ユダの王アハズにイザヤは神の重大な啓示を告げた。それは国運の如何に関らず不變の終末的現在を生きよとの啓示である。即ち「若き女」が子を産む。その子は「インマヌエル」即ち「神我らと偕に」の名を母親から賜はるのだという。この名がイエスの降誕のとき、預言として名づけられた（マタイ・二三、ルカ・三一等）。この「若き女」は「処女」ではない。しかしイエスの母マリヤの場合は処女であり、聖靈に因る。国の栄枯盛衰に拘らず、「神我らと偕に」を日夜の祈りとし、不断の現実とする人々は神の「遺れる民」である。

6月18日

蹟きの石
(イザヤ書8)

三
汝らは万軍の神なる彼を聖とし畏み彼をおそるべし。然らば神は
聖き避所となるべし。然れどイスラエルの両家には蹟きの石と妨げ
の磐とならん。エルサレムの民には網となり罌とならん。(イザヤハ・一
三、一四)

国際間の敵味方のごたごたは昔も今も同じこと。要するに人間がエゴイズムの捕虜とな
っている限り、歴史の終末まで、天候に雨や風や雪や曇天や暴風雨や晴天が千変万化して
いるのと同じことだ。東方にアッシリヤ西方にエジプトという二大国があった頃のユダの
国は、その他にアラム(シリヤ)エフライム(イスラエル)等がいてユダとの間がおもし
ろくない。イザヤはエホバに信頼してこう三度び叫んだ「汝ら碎かるべし」と(ハ・九)。
アッシリヤを怖れてこれに依存しているアハズとその臣下たちはイザヤのことを叛逆者と
見做した(ハ・一二)。イザヤは飽くまでも神を「聖き避所」としている(ハ・一三)。神の中に
走り入って避所とすると力を得る。不滅の力だから、仮令仆れても死なない。国は破れて
も民は亡びない。

そのような神信頼のイザヤは誤解や迫害の的である。だから叛逆者呼ばはりをする。
日露戦争の前、非戦論を唱えた内村鑑三は国賊呼ばはりをされた。イザヤは国民の「蹟き
の石」とされた。キリストは地上に永遠の王国を建てるメシヤと思はれて民衆にかつがれ
たが、彼は「わが国はこの世の属に非ず」と言ったので蹟きの石となった。弟子たちもイ
エスに蹟いた。キリストの原始福音は一般のキリスト教徒の蹟きの石となっている。

6月19日

遺れる者

(イザヤ書10:20-23)

二〇・二〇

その日イスラエルの遺れる者とヤコブの家の遁れたる者は最早おのれを撃ちし者に頼らず、誠意をもてイスラエルの聖者エホバに信頼せん。遺れる者、ヤコブの遺れる者は大能の神に帰らん。噫イスラエルよ、汝の民は海の砂の如しと雖も、その中の遺れる者のみ帰り来らん。そは滅亡はすでに定まり、義は満ち流れたり。そは主なる万軍のエホバは定め給へる滅亡を全土に行ひ給へばなり。

北王国イスラエルのアッシリヤによる滅亡の預言である。為政者の責任は重大で、方針をあやまれば国を滅亡に陥れる。日本も第二次大戦で遂に無条件降伏を強ひられたのであった。善良なる、有能なる、壮年青年がどれほどその犠牲になったか。このイスラエルの場合は為政者の神への不信や一般市民の権力者たちの横暴がアッシリヤによる神の義の審判の下に滅亡、捕囚の悲劇をもたらした。

しかしその中に遺れる者が少数ながらいた。遺れる者とは神信頼を貫き通す者の意で信仰不変のゆえに神に遺された者である。そういう人たちは神の許に帰りゆく。遺れる者は神に帰るといふ表現の奥は、実は神に不断に帰り行き帰入する者こそ遺れる者となるのである。イザヤがその消息を繰り返し告げているが、自分の子に、「シェアル・ヤーシューブ」即ち「遺れる者・帰り来らん」という名をつけたのは正に彼のこの信仰告白なのである。

常に帰神の態勢で生活すれば、天来のみ力で勝ち、遂に地を去って帰天するのである。

6月20日

靈的人格メシヤ
(イザヤ書11:1-5)

エッサイの株より一つの芽出でその根より一つの若芽生えん。その上^(エホバ)に神の靈とどまらん。これ智慧と明察の靈、深慮と能力^(ちから)の靈、また神^(エホバ)を知り且つ畏るるの靈也。
彼は畏神をもて歡樂^(たのしみ)となす。(イザヤ二・一二上)

ダビデの父エッサイの株から一つの芽がでて、その根から一つの若芽が生じてやがて靈妙な実を結ぶという不思議な預言である。これは「ダビデの子」(マタイ・二)と謂はれるメシヤ(キリスト)預言である。彼の上に神の靈が止まる。イザヤ六一・一二の預言へと展開する。このメシヤは智慧・明察の靈、深慮・能力の靈、知神・畏神の靈で靈的人格をこのように疊みかけて宣べているところは類例がない。而も彼は神を畏れるのが歡樂であるという。畏れるとはこわがることではなく、信頼深く平伏するのである。そういう平伏しには深い祈りがある。かかる祈りの相を神は愛し給う。神の愛を受けるから歓びとなり楽しみとなる。「畏れをもて接吻をする」という表現がやはりメシヤ預言の詩第二篇第十一節にある。敬愛の宗教的心境である。

このような靈的人格たるメシヤはその審判を眼や耳に由らず、内なる靈心を以てやる。卑賤な人々のために、神の義を以てふときな權勢を振り廻す奴らを審判し、「口の杖」を以て国土をたたき、「唇の靈氣」で悪人を倒すという驚くべき言靈の力をもった神人、靈人である。しかもこれ以上の深い心をもったキリストがやがて出現した。

6月21日

第二の樂園

(イザヤ書11: 6-9)

六
狼は羔と共にやどり、
豹は小山羊と共に伏し、
小牛と牡獅子は共に草食^はみ、
小さき童兒^{わらわ}にみちびかれ、
牝牛と熊とは牧場を歩き、
その仔らは相むつみ伏し、
獅子は牛の如く藁^{わら}を喰^くひ
乳兒^{ちち}は毒蛇の洞^{ほら}にたはむれ、
乳離れの兒は手を蝮^{むし}の穴に入れん。
斯くわが聖山何処^{いづこ}にも害傷なし。
そは水の海に遍^{あまね}きが如く
神を知るの知地に満つるが故なり。

(イザヤ二・六—九)

驚くべき靈的人格メシヤが出現すると、自然界の弱肉強食が動物の世界に於て歇んでしまう。そこではイソップ物語のような狼も、グリム童話のような狐も、クレオパトラが乳房を咬ませたような蝮もみな変質変貌して害わない。

このような夢のような愛の世界が啓示されるところに神の本願、預言書の、しかもイザヤ書の栄光がある。ルーベンスの名画もなほ描ききれないパラダイスである。

イザヤ書第三十五章がこの動物界に照応する植物界と人間界の樂園である。

その理由は即ち神を知るの知が全地に満ち溢れるからであると謂う。イスラエル人にとって神を知るといふ知の深さを注目しなければならぬ。彼らの「知」は対象を靈的に深い愛を以て全存在的に体認することである。そのような知をイエスは身証した。

6月22日

終末的和合
(イザヤ書19)

その日、イスラエルはエジプトとアッシリヤと共に三一を成し、地の真中にて祝福と成らん。

萬軍のエホバこれを祝して宣はく、「恵福なる哉わが民なるエジプト、わが手の業なるアッシリヤ、わが嗣業なるイスラエル」と。

(イザヤ一九・二四―二五)

この驚くべき祝福の三敵国和合の預言は学問の限界ではイザヤのものとは認められない。しかし啓示の次元は超学問ということ忘れてはならない。第十三章以降諸国の審判の預言が記されてある。

この第十九章は専らエジプトに関する預言である。しかもこの章の終りに、互に不俱戴天の敵たるエジプトもアッシリヤも向きを転じて神エホバに対する信仰を起こすという燐天の霹靂的事態となる。かくてイスラエルと共に三一的和合が成り立つ。第十九章第二五節は全く驚くべき神の祝福である。現実には不可能と思はれることなればこそ、イザヤが啓示を受けたとすれば、イザヤの深い悲願靈願に神が應え給うたわけではないか。

現代のソ連、アメリカ、日本がキリストに回帰し、武力全廃を全世界に呼びかけて、あの中国の戦国時代の戦闘的合従連衡ではなく、南北、東西の和合的合従連衡が円現するとき世界は天国、極楽となる。それはいつか！歴史の終末の此方でありたし！

6月23日

終末的救済と栄光

(イザヤ書24-27)

◎地の極よりぞ歌の聞ゆる、栄光は義しき者に！(イザヤ二四・一六)

◎地は碎けに碎け、地は破れに破れ、地は揺れに揺れたり(二四・一九)。

◎実存主は永遠に死を呑み、総ての面より涙を拭ひ給ふ(二五・八)。

◎わが心夜汝を慕ひ、わが内なる靈晨に汝を求む(二六・九上)

◎汝の死者は生き、わが民の屍は起きん。

塵に伏す者よ、醒めて歌ふべし。

◎後の露は草木を潤す露の如く、地の亡き魂を出ださん(二六・一九)

◎後に到らばヤコブ根を張り、イスラエル芽を出だし

花咲き出でてその実世界の面に満ちん(二七・六)

イザヤ書の預言は特にその審判と救済のコントラストが際立っている。第二四―二七章の中から右掲の如き著しい聖句を採り出してみた。二四・一六の如く義者はどう人にあしらわれようと究極的に栄光が帰せられる。二四・一九の如く全世界の諸相はこのような様相を呈して来た。二六・九の如く夜床上でキリストを慕い祈り入りみ懷の中に眠り入る。晨には内なる靈キリストを求め、キリストその者を得て一日を走り抜くのである。これが終末的現実を生きるというものだ。二五・八、二六・一九の如く死に勝ち、涙は飲びに替り、復活の生命に漲る。二七・六の如くヤコブ・イスラエルを象徴とする神に救はれた人々は夫々の特色を以て、根を張り芽を咲き花咲き実を結んで神の栄光は世界に現する！

6月24日

貴き隅石
(イザヤ書28)

「視よ、我れシオンに一つの石を据えてその基となせり。これは試煉を経たる石、貴き隅石、堅く据えたる石なり。これを信ずる者はたじろぐことなし。」(イザヤ二八・一六)

驕慢で傍若無神の権力者がエルサレム住民を塗炭の苦しみに遭はせ、しかも彼らは見たアッシリヤを恐れてエジプトを頼りにしているのである。イザヤはこれを見て、彼らは恰も「死と契約を立て、陰府と契りを結んでいる」も同然である。まことに彼らは「虚偽を避所とし、詐欺を以て身を隠している」不埒な奴らである、となした。

島国で徳川幕府が独専の時代、虎の威を衣て虚偽と詐欺の術数を以て奸商と結託し、暴漢を手足として専横を極め、逸楽に耽っていた地方の権力者どもの相を「水戸黄門」の時代劇が描いているが、東西の歴代の闇に葬られた善良な庶民の血と涙が徒らでなかった日がどうしても到来しなければならぬ。

このイザヤの社会批判に応えて神が終末的な救の石、象徴的な石を啓示し給うた。詩篇一一八・二二に「建築師の棄てたる石は隅の首石となれり」がこれに照応している。この首石を外すと建物が崩解すると同様に人間の社会と歴史からこの人物を外したらどうにもならない。その人を十字架に懸けて棄てた。そのように「棄てられた石」がキリストであった。だからキリストは葡萄園の譬話で御自分がその石だと喝破した(マタイ二一・三三―四六)。その「隅石」なるキリストに平伏してしがみつくのみ。

6月25日

天道地路

(イザヤ書30)

◎^げ実に主エホバ、イスラエルの聖者かく言ひ給へり、「汝ら立ち帰りて不動ならば、救を得、静もりて信頼せば力を得べし」。(イザヤ三〇・二五)——ルター特愛の聖句

○汝その耳に汝が後^{うしろ}辺より語るを聞かん「是れぞ道なる、是れを往け！」汝右せんとするとき、汝左せんとするとき。(三〇・二二)

右掲の第一言北のイスラエルにせよ、南のユダにせよ、東にはアッシリヤやがてはバビロニア、西にはエジプトという大国があった。それは今の日本にソ連、アメリカ、中国が北、東、西にあるように。日本は何を頼みとするのか、その工業技術力か、経済力か、我らには「立ち帰るべき」宇宙を創造し、歴史を支配する神は在まきぬのか。「信頼すべき」大愛の神は要らないのか。愛こそは最大の力であることを体現しようとしぬのか。単なる非戦論とか平和運動ではない。具体的に他を益する善隣交友の愛である。

第二言、人は人生に於て種々の岐路に出遭う。右せんか左せんかと迷う。そのとき神の声「是れぞ道なる、是れを往け」という第三の道とは何か。人間的な打算や分別を越えたものが神の天道である。祈りを以て天道に即せんとするところにその人の地路が示されてくる。それはどういう秘義か。「我れこそは道なれ！」と喝破したキリストを体受して自分が地路即天道となることだ。その境地はおのれが無路なのである。そのとき自由自在に即時的のつびきならぬ地路を開拓しゆくのである。

6月26日

畏神は国宝
(イザヤ書31-33)

○エジプト人は人にして神に非ず、その馬は肉にして霊に非ず。エホバその手を伸ばし給はば、助くる者も躓き、助けらるる者も倒れて、皆齊しく亡びん。(三二・三)

○神を畏るるはシオンの宝なり。(三三・六下)

○エジプトに頼ろうとしていた為政者に対してイザヤが預言した言葉である。信頼すべき神をぬきにして、大国の蔭に立とうとする愚を詰ったのである。肉なる人や軍馬ではたのみ甲斐なし。神にして霊なる実在者に依り頼めよ。そうでなければ、助けるエジプトも躓き、助けられるイスラエルも倒れて、共に亡びるぞとの警告である。

個人の在り方の問題にしても、全く同様である。生殺与奪の権威と愛を有つ神のみ手の中に在ってこそ、助け合いが美しい行為となるので、神との縦の關係が無いところではないには、ゆきつまりとなり、亡びを刈りとることになる。

○神を畏れるのはシオンの宝である。とは好い言葉ではないか。シオンはイスラエル民族の城たる名である。首都エルサレムのことでもある。首都の名はしばしばその国家の代名詞でもある。ロンドン、パリ、ベルリン、ローマ、ニューヨーク、モスコ、東京、北京が夫々の国を表はすように。これらの首都が神を畏れるなら、そのことが国の宝となる。ところが首都が肉的な繁栄を誇ったならそれは滅亡の兆である。「我々ドイツ人は神を畏れる。その他世界の何ものをも畏れない」とビスマルクは叫んだ。グラッドストーン、リンカン等も同じ次元の魂であった。神を畏れる首相もまた国の宝である。

6月27日

世界の破滅

(イザヤ書34)

諸々の国よ、近づきて聴け、
 諸々の民よ、耳を傾けよ。
 聴け、全地とその中に満つるもの、
 世界とその上に生ゆるものは皆！
 げにエホバは万国に対して怒り、
 その万軍に向ひて憤り、
 彼らをことごとく潰滅し、
 彼らを屠らしめ給ふなり。
 殺されし者らは投げ棄てられ、
 その死屍ゆ惡臭たちのぼり、
 山々はその血潮にて融かされん。
 天の萬象は消え失せ、
 諸天は巻物の如く巻き去られん。
 葡萄の樹より葉は落ち、
 無花果より朽葉の散る如く
 万象は枯れ落つるなり。(三三・一四)

諸々の国も諸々の民も、その中の政治力、軍事力、工業力、経済力等の力を有つ人々が闘争を競う。しかも虚偽、奸策、殺戮の父たるサタン(ヨハネ八・四四)の魔手の下、遂には戦乱を巻き起す。これはみな人間の中に巢喰う慾心の爆発に他ならない(ヤコブ四・二)。人類は自ら自滅の道を辿りつつ、戦争史を連綿として血と涙で綴っている。

神の愛を無みして逆に神の義の現はれたる審判を自ら招くのである。このイザヤは当時の世界状況を大観して上掲の如く、神の世界審判を眼前に見る如く謳った。世界は壊滅する。天地が大変動を来たす。第三章の大半はイスラエルの宿敵エドムに降る審判の天剣の預言であるが、要するに人間の惡業は神の世界審判を招く。しかし義と愛のため血と涙を流した人々を神が救済する時がくる。

6月28日

樂園回復

(イザヤ書35)

曠野と渴ける地とは樂しめよ、

砂漠は飲びてサフランの如く花咲け！

花咲き匂ひて飲べよ、喜び謳へ！

レバノンの栄光は彼女に与へられ、

カルメルとシャロンの壮美も彼女に。

彼らこそは実存主の栄光を觀

我らの神の壮美を觀ん。

その時も盲者の目は開き、

聾者の耳は聞こゆべし。

その時も跛者は鹿の如く跳び走り

啞者の舌は飲び歌はん。

実存主に贖ひ救はれし者帰り来らん、

彼らは飲び謳いてシオンに到り、

その首には永遠の歡喜あらん。

歡樂と歡喜とを彼らは勝ち得、

悲哀と悲歎とは逃げ去るべし。

イザヤ書第三四章がヤコブ（イスラエル）の兄エサウ（エドム）を代表とした神の人類審判、世界の壊滅を預言する地獄篇とするなら、この第三章はイスラエル全土とその都シオンを代表とした神の救済、樂園回復の天国篇。

預言者は大方詩人で、この詩は特に素晴らしい。第一イザヤと第二イザヤのいづれにも通ずる無名の詩人であろう。戦乱のため国は亡び自然は荒廃したが、神の来臨と共に自然界の樹木も草花も復活して樂園を現じた。人間界、特に身体障害者たちが神のみ霊の力で皆癒されて輝かしい相貌となる。実存主に贖い救はれた者たちが皆シオンに帰ってくる。

このような終末的樂土天国を現じた神の人がこの預言の如く来臨した。ナザレのイエスである。聖歌六二三、「いつかは知らねど」は正にこの第三章を謳った名歌である。

6月28日

(詩) サフランの歌 (イザヤ34, 35)

作詞1983.2.1.

歌調「ああ玉杯に」(一高寮歌, 楠正一作曲)

サフランの歌

1

曠野の如き 人の世や
文化はあれど 虚偽の

平和の蔭に 軍備あり
妖星走る 空の下

西も東も 平安からず
いつまでかくて あるべきや

2

天つ御神は 国々の
軍に向ひ 聖怒を

あらはし給ふ 闘ぎ合ふ
戦争起れり み審判の

天の剣は 血を浴びぬ
万象消えて いと暗し

3

わが腸は 沸えたざり
胸も轟き 裂けんとす

聞け爆音の 雷霆を
見よ爆弾の 炸裂を

原爆大戦 捲き起こり
全地は今や 生き地獄

4

敗滅の報 道を 空を飛び
混沌と淆乱の 地に化しぬ

幕屋はいづこ 見えわかず
刺草・薊 焼けただれ

狼・梟 影見えず
莫々たりや 全世界

5

時は移りて 時期を呼び
壊滅の夜は 明け初めて

朝霧霞む 地の面に
朝日の光 指しそえば

小草の芽生 現はれぬ
ああ復活の 春は来ぬ

6

見よ曠野には 紅白の
サフランの花 咲き薫り

見渡すかぎり 楽園に
復活したり あな不思議

いざ平伏して 聖名を呼び
声高らかに 讚美せん

7

レバノンの栄光 男の児らに
サフランの美は 女の子らに

6月28日

(詩) サフランの歌 (イザヤ34, 35)

作詞1983.2.1.

歌調「ああ玉杯に」(一高寮歌, 楠正一作曲)

10 羊の群が 牧はる 涸れたる丘は 緑して 砂漠の中に 川流る 曠野に泉水 たばしりて 主イエスのみ業 茲に成る	9 砕けの愛の人々よ 民族の差別 絶えてなし 時期は来れり 人よ聞け 盲者の眼 開かれぬ 跛者の耳 聞えたり 跛者の脚 立ちあがり 啞者の舌は もの言へり 主イエスのみ業 茲に成る	8 「遺れる民よ 汝らは 曠野の中に 恵まれぬ わが窮り無き 愛により 救はれたるは 十字架の 砕けの愛の人々よ 民族の差別 絶えてなし 時期は来れり 人よ聞け 盲者の眼 開かれぬ 跛者の耳 聞えたり 跛者の脚 立ちあがり 啞者の舌は もの言へり 主イエスのみ業 茲に成る	11 小鳥や蝶が 飛び交うよ イエス・キリストに 救はれし 民らは今や 復活の 大地の人よ 歎びて おのが天職 はげみつづ 交響楽を 編み成さん 神の聖旨の 成るままに 噫これ夢か 幻か 全地は今や 神仏に 伏しておろがみ 立ち帰り かたみにゆるし 相抱き 愛の世界を 体現せよ 聖書の預言 畏るべし	12 猛き獣の 影失せぬ 小鳥や蝶が 飛び交うよ イエス・キリストに 救はれし 民らは今や 復活の 大地の人よ 歎びて おのが天職 はげみつづ 交響楽を 編み成さん 神の聖旨の 成るままに 噫これ夢か 幻か 全地は今や 神仏に 伏しておろがみ 立ち帰り かたみにゆるし 相抱き 愛の世界を 体現せよ 聖書の預言 畏るべし
---	--	--	--	--

6月29日

ヒゼキヤの祈り

(イザヤ書38)

視よ、平安のためなりし、

我に苦難また苦難の来れるは。

汝わが魂を愛で滅びの穴より出だし、

げにや汝が後べにわが罪を

ことごとく投げ棄て給へり。

陰府は汝に感謝せず、

死は汝を讚美せず、

墓に逝く者は汝が信実を望まざり。

生ける者こそ汝に感謝するなれ、

今日の我れの如くに！

父はその子らに知らしむ、汝の信実を。

神は我にとりて救なり。

我ら奏でんわが絃歌を

我らが生命の日の限り、

み神の家に向ひて。

(イザヤ三八・一七—二〇)

ユダの王ヒゼキヤは始め信仰搖ぎ、アッシリヤ王センナケリブを恐れて貢物を贈ったりしたが、イザヤに責められてエホバへの信仰に立ち帰った。その著しい祈は三七章一六—二〇節に記されてある。エホバはイザヤの信仰に应えてセンナケリブのエレサレム包圍の大軍を一夜にして潰滅せしめ給うた。それは紀前七〇一年(イザヤ三七・三六—三八)。

ここに掲げたヒゼキヤの祈りは三八章に記された彼の病後のもの。この祈りを聴いて感ずるのは、どんな時にも神は自分を愛し給うこと、すべての罪過を投げ棄てて下さること、死も陰府も我らに關はりなきこと、我らはキリストに在っては死んでも死なぬこと、人生は聖名の讚美で貫くべきことである。

6月29日

(時) イザヤの預言 (イザヤ 1-33, 36-39)

作詞: 1983.6.23

歌詞: S. 214 「北の極なる氷の山」

イザヤの預言

1 「いとも聖なる 万軍の主

その栄光は 全地に満つ」

セラビム舞いて かくぞ歌ふ

神殿のために 霊に震ふ

2 霊に感じて イザヤ叫ぶ、

「禍いなるぞ われは亡ぶ

万軍の主を けがれし我れ

見まつりたれば われは亡ぶ」

3 「セラビム我れに 飛び来たりて

わが唇を 火にて焼けり

主のみ声あり、「誰を遣(や)らん」

「遣はし給へ 我れはここに！」

4

「愛の愛なる葡萄園よ！

酒槽、望楼、備へせしに

結びしは是れ 野葡萄なり

棘、荊の 荒野とならん

5 神の審判と 神の義とを

求めてそこに 生きて在れよ

シオン審判かれ あがなはれぬ

帰る者らも 神の義にぞ

6 神の徴は いつ出づるや

運命の危機ぞ 祈り待てよ

徴は何ぞ「インマヌエル」

乙女の子なり メシヤ予言

7 主は避け所 廣く石

妨ぐる磐 民らの網

罟ともなりて 救の主なり

万軍の主の 愛は是れぞ

8

センナケリブの 雲霞とまがふ

大軍来たり エルサレムを

包囲せしかど 何か恐れん

6月29日

(詩) イザヤの預言 (イザヤ 1-33, 36-39)

作詞: 1983.6.23

歌詞: S. 214 「北の極なる氷の山」

エホバにイザヤ 祈り入れり

愛のあふるる 聖国来たれ!

9

イザヤの熱き 祈りに応へ
主のみ力は 現はれたり
アッシリヤ軍 一夜にして
壊滅したり 神の力

10

エッサイの根ゆ 芽出でぬ
エホバのみ霊 これに宿り
智慧と明悟と 能力に満ち
腰に義の帯 身には信実

11

「わがエジプトよ わが手のわざ
アッシリヤ国 イスラエルと
相携へて 我に帰らん
その日世界は 平和と成らん」

12

狼、羊、豹と小山羊
牧の牡獅子 牝牛と熊
乳児と蛇 相助くる

6月30日

エレミヤの召命
(エレミヤ記1)

一・四エホバ 神の言我に臨みて言ふ^五「我れ汝を腹に創らざりし先に汝を知り、

汝が胎を出でざりし先に、汝を聖別し、汝を立てて万国の預言者と
なせり。」我^ガ応へけるは「噫主エホバよ、視よ、われは語することを
知らず、そは我は若輩なればなり。」エホバ我に言ひ給ふ「汝、わ
れは若輩と言ふ勿れ。すべて我が汝を遣はす所に往き、我が汝に命
ずることをみな語るべし。汝^ハ彼らの顔を恐る勿れ。そはわれ汝と
偕に在りて汝を救ふべければなり。」と。エホバそのみ手を伸べて
わが口につけ、我に言ふ「視よ、我れわが言を汝の口に入れたり。」

南王国ユダ没落の夕暮に国の運命を荷ってその滅亡を共にした預言者エレミヤは、深い
涙の人で、北王国イスラエルの没落時に同じく悲涙を滴らした預言者ホセアの霊統を継ぐ
偉大な心の預言者である。彼は専王マセナ時代の六四六年頃祭司ヒルキヤの子としてエル
サレムの東北方のアナトテという丘陵地帯の町に生れた。エレミヤとは「エホバは射る」
の意で、神の言を矢の如く発する彼の使命を表はしている。彼は右掲の如く、生れぬ先か
ら聖別され万国の預言者と定められていた。若輩の彼に召命が降ったので、モーセと同様
自分を見て神にお断りを言ったが、年輩など問題に非ず、といって神は聖手を彼の口につ
けてわが言を腹に入れたぞ、と。而も「我汝と偕に在り」、わが權威ある言を伝へよ、怖
れるな、と。